

平成 28 年度日本語教育能力検定試験

試験 I 問題冊子 (抜粋)

問題 4 次の文章を読み、下の問い（問 1～5）に答えよ。

コミュニケーション能力の育成を重視した教授理念に、コミュニケーション能力の育成を重視した教授理念に、^A コミュニカティブ・アプローチがある。指導にあたっては、現実のコミュニケーション場面に基づいた教材を使用し、^B 実践的な言語活動を行う。

タスク（課題）を達成することを主眼としたタスク中心の教授法^Cもコミュニケーション・アプローチの考え方が基盤となっている。学習者は、学習した言語表現だけでなく、様々なストラテジー^Dを駆使してタスクを遂行する。また、タスク中心の教授法に近いものとして内容重視の教授法がある。近年、教科内容と言語を統合して学習する中で、学習者に様々な認知活動を促す内容言語統合型学習（CLIL）^Eが注目されている。

問 1 文章中の下線部 A 「コミュニケーション・アプローチ」の背景となる考え方の一つとして最も適当なものを、次の 1～4 の中から一つ選べ。

- 1 学習の初期段階では理解優先とし、目標言語で発言することへの心理的圧迫を避ける。
- 2 目標言語の音声や文法を習慣づけることで、母語の干渉をなくすることができる。
- 3 言語学習は単なる習慣形成ではなく、学習者自らが帰納的に文法規則を見つけるものである。
- 4 会話の中で意味交渉が生じることによって、言語習得が促進される。

(正答 4)

平成 28 年度日本語教育能力検定試験

試験Ⅱ 問題冊子

(抜粋)

問題 2

これから、教師が、学習者の発音上、問題がある箇所を言い直します。発音上の問題として最も適当なものを、問題冊子の選択肢 a, b, c, d の中から一つ選んでください。

1 番

- a アクセントの下がり目と句末・文末イントネーション
- b 拍の長さアクセントの下がり目
- c アクセントの下がり目
- d 拍の長さ

[1 番の音声](#) (クリックすると音声がかかります。)

(正答 b)

平成 28 年度日本語教育能力検定試験

試験Ⅲ 問題冊子

(抜粋)

問題 9 次の文章を読み、下の問い（問 1～5）に答えよ。

異文化に接触した際のスムーズな適応のための異文化トレーニング^Aは、1960年代のアメリカにその起源を発し、目的や内容に応じて、様々な方法が用いられてきた。

「認知レベル」のトレーニングは、特定の文化に関するものと文化一般に関するものの2種類に大別される。前者では、特定の文化における適切な対人関係のルールや、社会規範、人種や宗教等についての知識や情報を得る。後者では、偏見や自文化中心主義^Bなど、異文化コミュニケーションにおいて生じやすい問題について学ぶ。

「情動レベル」のトレーニングでは、異文化に直面したときの自らの感情を理解し、それを制御するために、心理テスト、ロールプレイ、異文化シミュレーションゲーム^C等の活動が用いられる。こうした活動においては、参加者の気づきを促すために、訓練されたファシリテーター^Dの存在が欠かせない。

「認知レベル」「情動レベル」のトレーニングを通して異文化接触の不安が軽減されると、積極的に異文化を理解し、コミュニケーション活動に参加する「行動レベル」での変化が期待される。自分とは異なる価値観に遭遇した際に、(ア)という措置を取れるのも、こうした変化の一例である。

問 1 文章中の下線部A「異文化トレーニング」に関する記述として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選べ。

- 1 参加者それぞれの文化的背景を考慮して、プログラム内容を構築する。
- 2 体験型のトレーニングが中心で、講義形式の学習は行わない。
- 3 渡航前の準備として行うもので、滞在中や帰国後に行うことはない。
- 4 過去に異文化体験をしたことのある者は、トレーニングの対象外とする。

(正答1)